

住んだといふ歴史をもつてゐるが、今は荒廢してゐる。

數多き温泉町

エッゲルに近く、フランチェンバッドがある。こゝはファイテル山脈と、エルツ山脈と、ボヘミア森林との結合せの所にあつて、十箇所から温泉が湧いてゐる。炭酸ガスを含んだ含鐵鹽類をその主成分とし、飲用、浴用、泥浴用及びガス浴用に供せられてゐる。この町は森の中に非然と區劃された街で、周囲は公園として浴客の散策に解放されてゐる。

エッゲルからビルゼン行の汽車に乗ると、この線路とカールスバッドからの線路との會點にマリエンバッドがある。こゝもまた有名な温泉場で、マツエンバッド河畔の床しい谷の中にあり、三方は松林の丘に包まれてゐる。温泉はカルスバッドのそれに似てゐるが、温度は低い。飲料温泉として年々數百萬本瓶詰として賣り



マロらくいかし。よところあでうやの繪で美優の装服のそとな。ちた女男の姓百た見で近附ラヴグスイデラブ ちた婦農夫農いし美
るめしせは想を臺舞の劇歌喜。るあで姿著晴の曜日か日祭。いなはでけれるのてしを装服なんこ常平もでちた姓百の國のこなクイテン

出され、また浴用にも供してゐる。

またもしブラーグから、北へエルベに沿うて下るならば、ビエラ河との合流點にあるアウシツヒに達する。こゝは大きな工業地で、石炭商業の盛な所。人口約四萬人。北ボヘミアの廣き蘆炭々田は、この町の少し西にある。有名な畫家ラファエル、メングスの生れた所である。エルベの向側、シュレツケンシュタイン停車場の後の丘はエルベ河畔に岫立ち、ラインのローレイにも比すべき景色を呈する。

アウシツヒから少し西に向ふと、テブリツがある。テブリツとはスラヴ語の温泉といふ意で、便利な温泉場である。人口約二九、〇〇〇、エルツ山脈とボヘミアのミツテル山脈との間の盆地の中にあつて、こゝの温泉は七六二年に發見されたといふ。主に浴用として使用されてゐる。町の真中には保養園がある。

またもしブラーグからモルダウ河に沿うて眞南に廻り、オーストリア境に近いポインアンの高原に入れば、ブッドワットの町がある。モルダウに沿うた人口四萬四千程の繁華な市である。

こゝには千五百年を経た塔を有する寺院や、美しい市役所、博物館、公園等がある。



とた。るみでん並立が物建の設公の各種はに下眼とるめ眺を方西らか上頂のグルペルーピュシのり聲に方後の市 観大の市ンシュリブ
。るみでん霞が丘の外郊はに方彼の町遙てしを。るえ見が曝劇いし美。るあがゲンイデルピの會協ガラス。るまが校業工等高はにこそばへ

モラヴィヤ地方

フリユン

ボヘミアの盆地から東南方に向つて、メーレンの山地を越えんとモラヴィヤの地方である。この地方は、オーストリアからポーランドに通ずる交通路をなしてをり、幾多の河流は船の便には乏しいけれども、東部ヨーロッパ南北を結ぶ多くの鐵道は、これらを辿つてゆくのである。この中心がブリュンであつて、オーストリア、ハンガリア及びバルカン諸國から、ポーランド或はボヘミアに入り、ドイツの方に行く交通路に當つてゐる。

ブリュンはモラヴィヤの首府で、ドナウの支流マルヒ河の分流タヤ河の上流にあり、シュワルツァバアとツウイツァワの二つの小さな河の合流點にあつて、スピール・ベルグの麓における豊饒なる地方にある。その郊外を加へると人口二二萬一千、この市は第九世紀より重要な地で、鞣革工業及び織物工業地として有名である。従つて工業學校が二つもある。舊市街は道路は不規則であるが、その楕圓形の町を、幅の著しく廣い多角形の大通りが廻つてゐる。この大通りの中には庭園になつてをり、官公署が散在してゐる。ブリュンの停車場を降りて左すれば、大通のフランツェンベルグに至る。そこには一八一三年のライプチヒの戦を記念する、灰色大理石のオペリスクが建つてゐる。ここから右の方にはエピスニバル宮殿があり、その後にはサン・ピエトル、サン・パウロの伽藍が聳えてゐる。第十五世紀にはゴシック式に建てられてゐたが、スウェーデン人に破壊されたので、その後ロココ式に修繕された。

ここから更に北に行くくと、スピールベルグの丘に登る。その上に同名の城壁を載せてゐる。これは一六二一年から一八五五年の間牢獄に使用された。この丘は今公園になつてゐて、道路が縦横に通つてゐる。丘を

下つて少し北に行くくと、エリザベスの廣場に來る。こゝには高等工業學校や、中學校等の公共建物がある。町の中央に至ると三角形の廣場があつて、そこに一六八〇年に建立のマドンナをいたゞいた高い塔が立つてゐる。その北にはヤコブの寺がある。

廣場の東の方には博物館があり、非常によく整ひ、特に人類學的、考古學的資料がよく整理されてゐる。廣場から南の方へ戻ると、クラウト市場がある。毎朝附近の農夫がこゝに集つて、野菜、果物、花等を鬻いでゐる。ことに面白いのは花畑の土をもつて來て賣つてゐる人達を澤山見ること、これはわが國では考へ及ばぬところである。市場の附近には市役所もあるし、高等商業學校もあるし、そのほか町には兵營もあり、病院、裁判所などデコ・スロヴァキヤ第二の都會としての設備が備はつてゐる。



景風場市のシュリブ
で夫農の舍田る來にき捌賣でん運み積を實果や物青のり作手ていだしみふを露いた冷朝いまは場市のシュリブ

民族の熔鑪

かの有名なメンデルはこの市外の丘陵に立つてゐる僧房において、遺傳學の實驗をやつたのである。メンデルがこのブリュンに生れたといふことは偶然でない。前述のやうに、地形から見るとモラヴィヤは、ボヘミヤの平和境とカルパティア山との間にあつて、北は北海、バルト海より、南は地中海、黒海の方への通路にあたる。それ故、北から來る民族も南から入る民族も、將また東洋の民族、西ヨーロッパ民族もみなこゝに集るのである。即ちこゝは人種をとく熔鑪のやうである。試みにブラーグからブリュンの方に旅行すると、その顔色の千差萬別なるに驚くであらう。東洋人のやうなもの、西洋人のやうなもの、ドイツ人、スラヴ、ラテン、さてはジプシイ、ユーデンもある。こゝはこれ等の血が混するので、他の歐洲の都會をさまよふ人々とは、異つた趣きを呈する。その丈の高さも六尺豊かな大男があると思へば、四尺をやつと越えた偏僕もある。またわが日本人と比べても、敢て悲觀の必要もない、五尺内外の人人も少くない。

金髪をたゞよはせ圓く肥つた美人も見られれば、黒髪を被つた地中海民族の、日本人趣味の娘もゐるといふ有様である。かく直接わ

れわれの眼に見た範囲でも種々の人種があるといふことは、やがては遺傳を深く考へさせる原因となりはしまいか。かくてこれはメンデルをして、遺傳學にその一生を獻けるといふ動機を與へたものと思はれる。

ブリュンと共に毛織物業で有名な町に、イグラウといふ所がある。人口は約二萬二千、ドイツ語が主に行はれて、モラヴィヤからボヘミアに行く途中の、ポインアン高原の所にある。

またブリュンから東北方には、モラヴィヤの昔の首府で、人口五萬七千ほどのオムリツツがある。マールシュ河の上流の肥沃なる盆地の中にある。

スロヴァキヤ 地方

モラヴィヤから、小カルパテイアの山地を東に越えればスロヴァキヤであつて、變



都首のヤキアウロス 城古町のまはいでまをろするのヤキアウロスの都首のまはいは廢址を心中に新しう物建たされたる新しう目新しうをたし。址のむらびすたが中の新氣の運に名にげれそは昔の國の獨立を尊し傷らけつたれそは思ひ出されしるに今日に視をたしなく。

化の多い點をもつて聞えてゐる。先づ擧ぐべきは、土地の起伏の著しきで、カルパテイアを始め到る所に山地があり、メタリック山の近傍にはその名の如く、礦物を産し、サリ地方には圓錐形の火山をも有してゐる。しかしスロヴァキヤの山岳としての興味は、タトラ山嶺に歸することができ、特に高タトラがさうである。その最高峰はジェルラッシュニで、一、四〇〇メートル以下は立派なる大森林で覆はれ、その間には瀑布、美しい湖沼等が到るところに見出され、中にも「海の眼」と稱せられる二つの湖は、ポブラドとストルブスキ湖とを指すのである。

スロヴァキヤには、またローマ時代、大モラヴィヤ時代、第十六世紀時代等の廢墟を残し、モラヴィヤ、ドナウ兩河の合流點附近には、要塞の遺跡に富む。また最近に探險されたデマンノヴァの洞窟は、その大ききにおいて全歐洲にその比を見ず地下には多量の水が流れ、ベラン、ドブシナ等の洞窟もまた訪れる價値がある。都會としてはプロチスラヴァも注目すべき一つであるが、トルノヴァは嘗てツェスイトの大學の所在地で、多數の教會があるのので、スロヴァキヤのローマといはれる。ニトラはこの地方におけるキリスト



花嫁嫁花 質業暗着に細朴な民愚これ
。今日晴れの式にそびる花嫁花嫁

違ふのである。特に山脈地方と平原地方とはいろいろの方面において差異がある。若い娘達は婚期までは頭には何も冠らないが、男は鍔廣その他種々の帽子をつける。

ブラチスラヴァその他の都市においては、壁の外側、臺所の煙突の上、室の壁等は壁畫をもつて掩はれ、ビザンチン風の模様で花鳥が施されてゐる。尚ほまたレースや袖口に、素朴な傑作品のあるのを見て驚かされること

教の搖籃の地で、大モラヴィヤ時代の都會の一である。トランサンにはフランス織物工場があり、チリナ國際鐵道の要點に當つてをり、スピスケボドラジヤはチエコ・スロヴァキヤで最も大きい城を控へてゐる。

メタリック山脈中にはバンスカ・ビストリカ、クレムニカ及びバンスカ・ステアヴニカ等、隆盛時代の都會を残して今では工場の出現をさへ見てゐるに拘らず、「生きてはバンスカ・ビストリカに、死しては天國に」と、いはれるほど住みよい所である。

面白い風俗

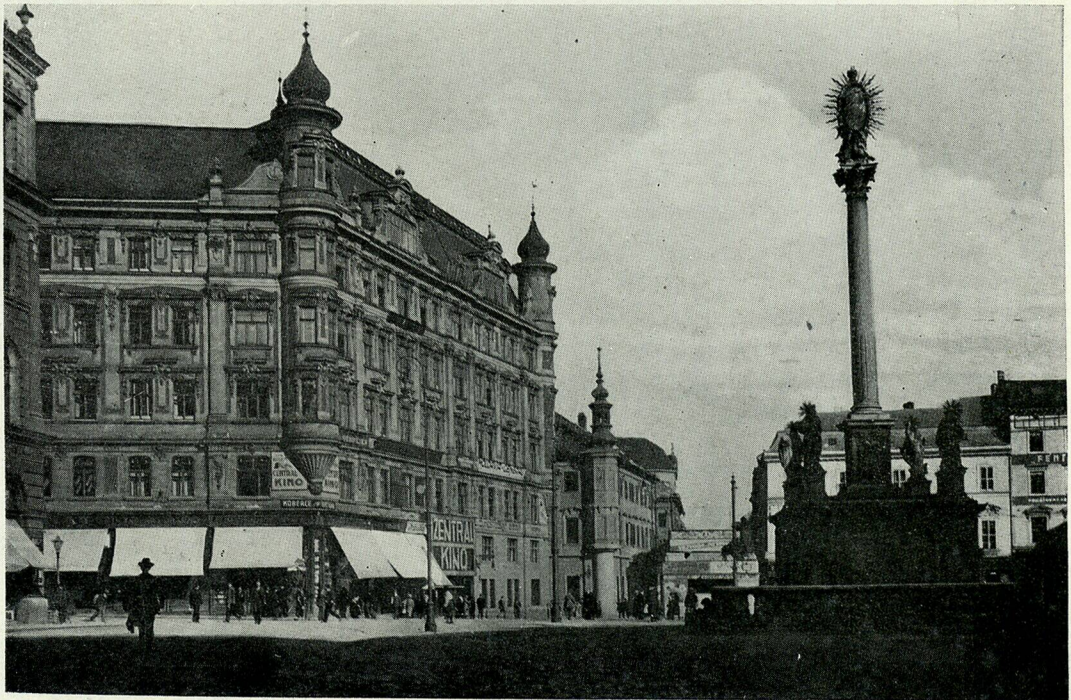
各地方にはそれ／＼異つた衣服、ダンス、歌等が存して、昔年らの遺風を止め、村と村とが衣服を異にしてゐるのみならず、年齢により、或は身分によつても



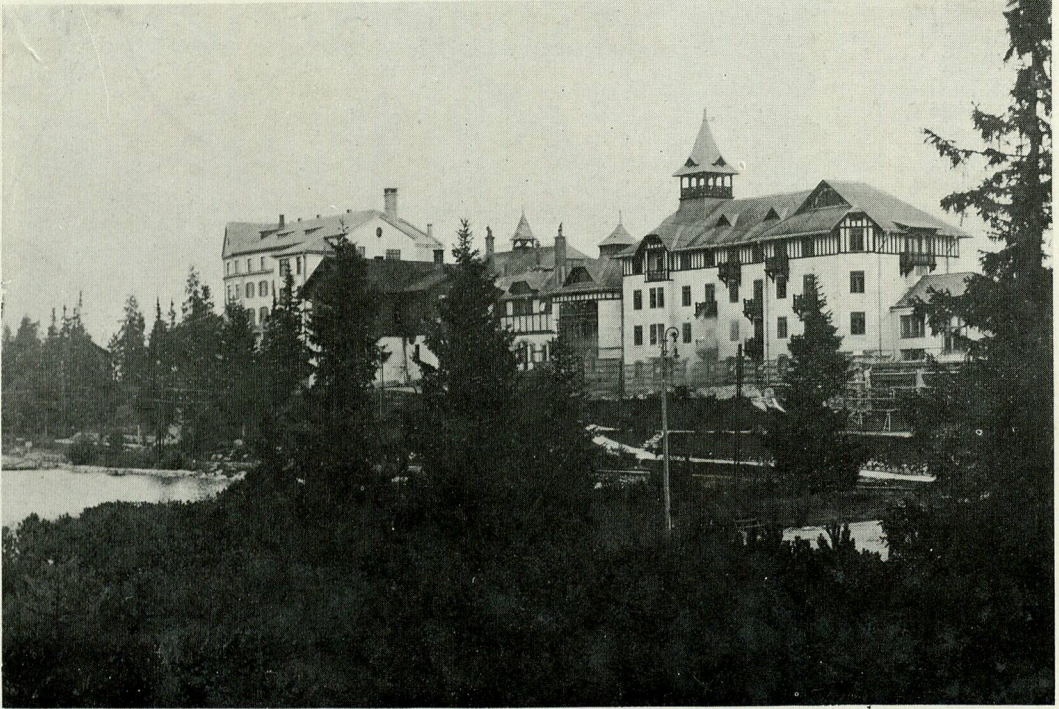
高。るゐてし溢横が分氣舎田婆老む瀧をプツホに心無 婆老む摘プツホ
。るゐてへ儂を俗風の國のそくよどな着上な手涙に布頭の赤。くつを鼻が香い



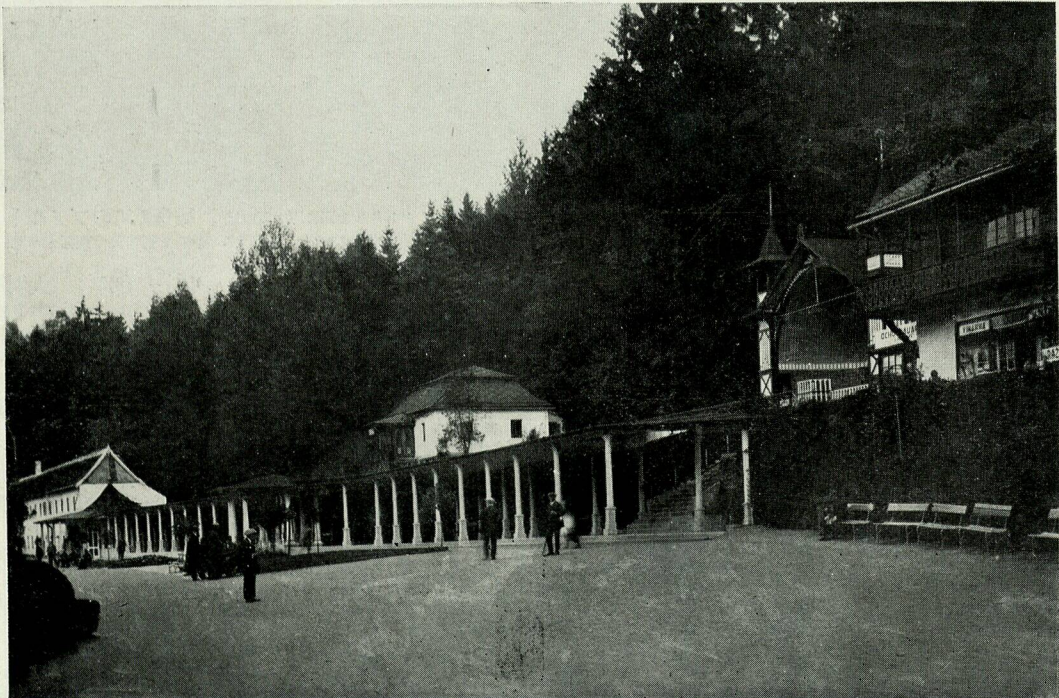
あでのもたれら造に年二八八一つあに方の北のグンリーザイカ市シユリブは築建大の風ヤシリギたしとりしつどのこ 場劇シユリブ
。たつだてめ初が、こはのたつ使を燈電に臺舞でパッローヨ。たつだンダモは頃のそがるあてれは思と物建いしかめ古そこで今は場劇のこ。る



みてらて建に頭柱い高が像のナンドマはに中んまの場廣。るあてい續に場廣のこはり通大の窟目市シユリブ 場廣大の市シユリブ
。るす來往が々人たしをひ装いし美せ見をひ賑なかや華もかしたいつち落び並建がどなトシラトスレ大や店商大てしに心中を場のこ。る



は湖キスプラトス。るあでルテホ・ソレブ・キスプラトスの畔湖キスプラトスは物建いる明るゆ聲てい抜を林緑のこ **畔湖キスプラトス**
 るす取吸を客の外國內國てしと地暑避の好絶るけおに季夏は候氣な標高と氣空るな澄清のを。るあで湖るあに上山のラトタエーホる知も人

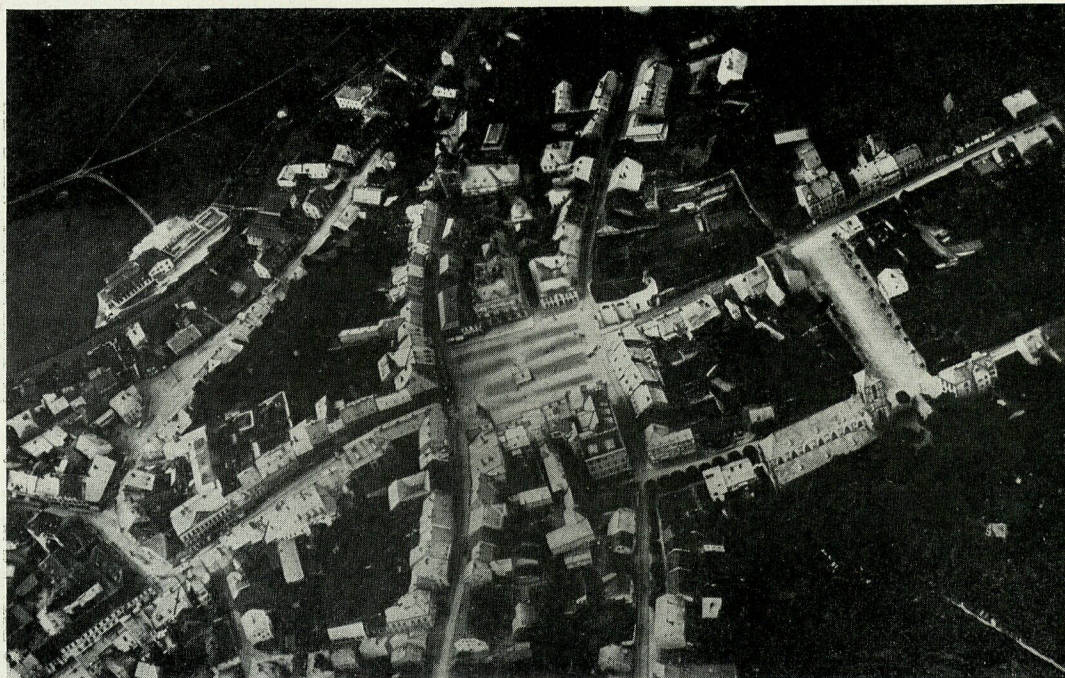


用共客浴は、こ。るあてきでが真装樂娛の々種はに湯泉温めたるめさぐなを聊無の客浴たつかぎ遊に樂歌の會都 **近附堂樂音の泉温**
 るれ憶き聴てけ掛腰にチンベは或み件に湯廣や下廊長ないれきのこは々人た出に歩散の朝。るれは行が奏演な快爽らか時七朝毎で堂樂音の

があり、しかもそれが、島に蹴もつ婦人連のなぐさみによつて作出されるのである。

ブラジスラーヴァ

もとのプレスブルグ、即ち今のブラジスラーヴァ、一名ボジソニアは、オーストリアとの國境に近く、ドナウ河の北側にある一つの古い都であつて、人口は九萬三千、小カルパティヤ山脈の一支脈がドナウ河に迫るところの丘の上に位し、昔のハンガリアの首府であり、ハプスブルク家の國王の戴冠式の行はれる所である。市の中心部は舊市街區または内區といひ、西にはテレシエン市區があつて、そこに一つの古城がある。北にはフェルジナンド街、東南ドナウの畔にはヨセフスタット、遙北の方には新市區がある。舊市街の中心部の廣場にある市役所は、一七八八年に建てられたもので、その中には市の博物館があつて、ローマ時代及び中世紀の武器、或は軍服とかいふやうなものを

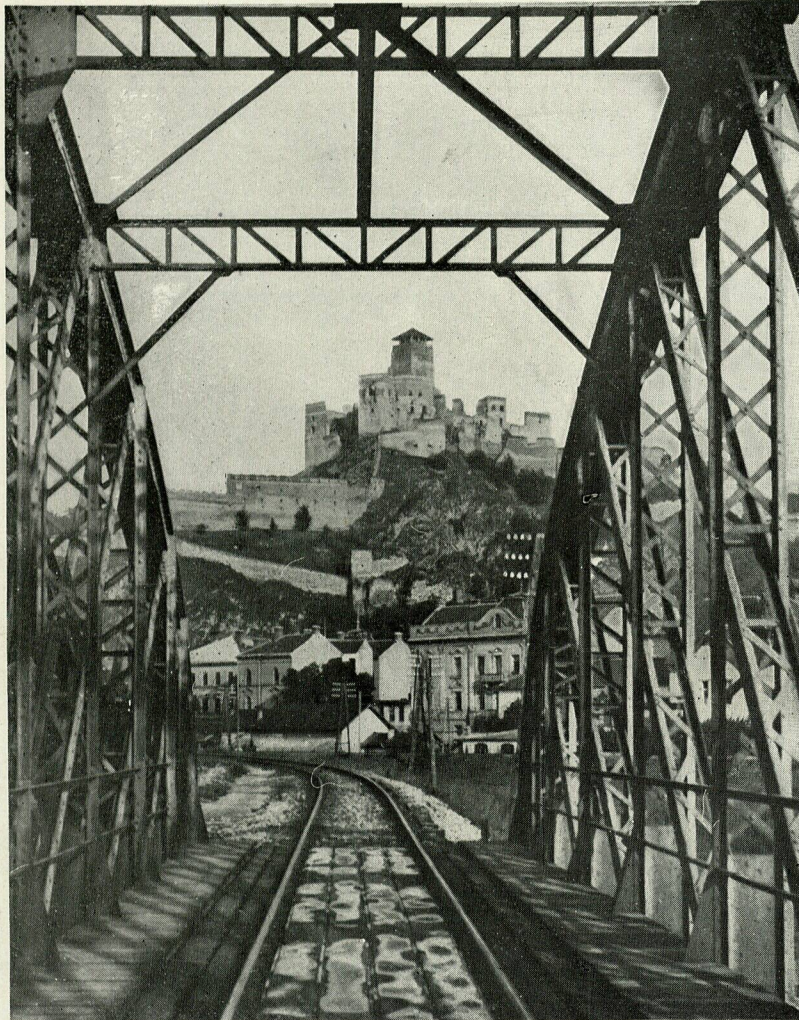


ブノフの町の鳥瞰 緑の野と森にまじつたブルトの町の自然の園樂如く美しく、一條上條に走るに野沃の路に西東北につく。りま眺にともる望一はまさるみにつく多とんだんだも々家り集が路道か條幾に心中を町のつ。るみてつ横にか靜てれき劃區とりき

陳列してゐる。市役所の後には、ハンガリア大僧正の冬の宮殿がある。またサン・マルティンの寺には、ゴシックの大伽藍があり、これが即ち昔ハンガリア王の戴冠式を行つた所で、一三〇四年に建てられたものである。ドナウ河の畔の丘の上には、大理石で作つた、マリヤ・テレジャの記念像があつて、女皇帝は馬に乗り、その傍にハンガリア及びクルツの偉傑が跪いてをり、そしてその土臺には「命と血」と書いてある。西の方の丘陵に登ると、一八二一年に燒けた昔の王城の遺址がある。その塔に登つて見ると、北方には小カルパティヤ山の山腹に葡萄の畑が擴がつてゐるし、眼下にはドナウの河が蛇つてゐて、繪のやうな古い舊市街がその畔に擴つて見え、河の向ふ側にはオーストリアの町々が、手にとるやうに見えてゐる。ドナウを越えるフランツヨセフの鐵橋は、今から約四十年前に架せられたもので、散歩に好適の所である。殊に夏の晩のそゞる歩きは、市民の最も喜ぶところである。川の向ふには、野外劇の劇場もあるし、競馬場もある。

コモルンの古城と テレシエンの史蹟

ブラジスラーバからドナウに並行して下ると、ワグ河のドナウに合流する近くにコモ



近附もかたあはれそ。城古るゆびそてしと然腕に側左のゲーワてし通見を橋鐵い長 塞要ンシンレト
るあルトーメ三三約はさ高の塔。るあて囓廢の塞要の時昔きとごがるす視監み望に下足ほなも今を野平の

ルンがあつて、要塞地帯として昔から武装された所である。人口は二萬三千、一八〇五年マテユウコルティヌス王の建造したところのものだが、一八四九年のハンガリヤ戦争のときには、クラブカ將軍の率ゐるハンガリヤ人が、巧みにこれを防禦したので、今その人の銅像が立てられてゐる。こゝは穀物材木の取引並に造船業が盛である。
ワググ河を遡る中流左岸にあるトレンシンには昔の要塞の跡がある。

カッシャウとエヘルジェス

城の井戸は深さ一八〇メートルあり、これはトルコの捕虜が岩の中に切り掘つたといふことで、その名が聞えてゐる。また第十四世紀に建てられたといふバリシユ寺がある。ゴシックの建物である。その中にはイレスハジ伯爵のモニメントがある。河の向ふ側には古い寺の跡がある。

スロヴァキヤの東部タイス河の流域には、カッシャウといふ町がある。これは昔の王領の自由市である。ヘルナード河の右側にあつて、人口は五萬三千その中心區は非常に規則正しく區劃されてゐる。昔の要塞で堡壘によつて取りまかれ、郊外の街とは區別されてゐる。この町は軍事上及び政治上の要所である上に、盛んな商業都市である。尙ほこの町には有名なカセドラルがあつて、それは舊ハンガリヤ領では、最も美しいゴシックの寺である。第十四世紀の建築にかゝるのである。なほ市外のカルバリ山は、その風景絶佳なるをもつて名高い。
カッシャウの北、タルシザ河の畔には、エベルジェスがある。サロシグンの首都で、今なほ城壁にとりまかれてをり、中世紀以來の建物を多くもつてゐる。この附近にはごく濃厚な食鹽泉があるので製鹽業が榮え、それは主として南方郊外において行はれてゐる。(田中館秀三)

世界地理風俗大系 第十五卷 了